

■テーマ1：地域（避難先）でどのようなつながりがあれば、避難者一人ひとりが安心して暮らせそうでしょうか

- ・ つながりは、年代によって異なるのではないか。子育て世代は、子どもを通じて地域になじんでいけるが、年配の方々が地域と交流を深めていくのは難しいのではないか。
- ・ 子どもでも避難先になじむのが難しい場合があり、不登校になった子がいたが、親子で参加できる交流企画を実施して地域になじめるようになった。
- ・ 避難先に永住を決めた人たちは、地域に密着しようと自らも努力していた。嫌がらせは少なくなかった。餅つきなどの交流イベントを通して関係性を築いていった。
- ・ 助けて助けられるというお互い様の気持ちを持つことが大切だが、みんなで協力して、お世話になった地域の方へ恩返しするという雰囲気にはなりにくい。団体のメンバーによる。
- ・ 一人暮らしの方は団体の活動に出てこないのでは、チラシを配るだけでなく、声をかけるようにしている。
- ・ 自分から壁を作っている場合はつながりにくいですが、支援する側としては変わらず、支援していきたい。
- ・ もしこの会（団体）がなくなったらどうする？といつもメンバーに問いかけている。
- ・ 地域に溶け込む努力は必要。地域のイベントに誘われたら断らないことが安心して暮らすために必要ではないか。
- ・ 強制避難と自主避難の間にも壁がある。
- ・ 福島からの避難者はどうしても原発の話をしてしまうので、岩手や宮城からの避難者が来づらくないように、サロンでは原発の話はしないことにして、同じ避難者として仲良くしている。
- ・ 今というより、次に移った先でのつながりを考えていくことが大切。移った先の社協などで把握して対応してもらえるといいと思う。
- ・ 会のイベント案内を地域のお店に置いてもらったり、イベント講師として地域のお店の方に来てもらっている。イベントも夏休みや冬休みに開催するものは避難者だけでなく地域の人にも親子で参加してもらい、避難者の事を知ってもらう機会にしている。
- ・ この6年半で免許を返納した人もいるので、サロンに参加するのに駅まで迎えに行っている。負担もあるが、それでも避難者同士話せる場を続けていく事が必要。
- ・ 都営団地にいる時は避難者も多く、何人かで自治会にも入って地域の祭りも手伝っていた。2年前に家を購入して引っ越したが、まだ地域になじめない。新興住宅で若い人も多い。引っ越した当初に、町内会にも誘われたが入る気にならず、双葉町人同士で集まる会で動いていた。来年には今の地域で町内会に入ろうかと考えている。
- ・ 引っ越した人にも時々連絡をいれたり、1年に1度プレゼントを送ったりしている。誰かとながらっていてももらえればと思っている。

- ・ 訛りが気になって言葉を発せられない人や家から出られない人もいるので、避難者だけが集まる場もまだ必要。また、自主避難で母子避難だと生活が苦しい人もいて、電車代を出してサロンに参加が難しい人もいる。なるべくサロンは場所を変えて行うようにしている。地域の方の参加もあるが決まった人。
- ・ 同じ避難者というだけで、LINEのグループでつながるだけでも安心している。
- ・ 誰でもウェルカムな会を運営している。会では各参加者が責任や役割を持ち、ただのお客さんにならないようにしている。方言で話したい、子どもの教育問題について話したいという気持ちに寄り添い、みんな仲間だよというつもりで活動している。電話相談もやっている。LINEのグループを始めて、お互いの誕生日にメッセージを送るなど、直接会えなくてもつながりを感じられるようになった。
- ・ 今年のテーマを地域の人との共生として、地元の人と関わり合うことを意識して活動している。何年経っても避難先でお世話になっている、歓迎されていないのではないかと思ってしまう人が多い。
- ・ 地域の人を外部講師として招き、料理やアロマを教えてもらっている。
- ・ 避難先は高層マンションで、地域という言葉が存在しないような地域。区域内避難者と自主避難者の交流はほとんどない。社協を通じて繋がることもある。
- ・ 当初、自転車で市内を回って東北ナンバーの車がないか探して回っていたが見つめることができず、その様子に気が付いた地元の人がボランティアとしてサポートしてくれるようになり、会を開くようになった。地域の方から花見に招待されたのが交流のスタートだった。
- ・ サロンは広く開かれていること、定期的で開催されていること、来る人のニーズに合わせた内容・時間であることで人が集まりやすくなる。
- ・ 当初は支援も多く予算もあったが、避難者の高齢化や移住なども増え、お茶っこだただおしゃべりするだけの時期では行かなくなってきた。来れば何かしらの情報が得られるような会にしたい。
- ・ 今日のような会では参加名簿に連絡先があって、その後に連絡する方法があればと思う。→名刺交換の時間で連絡先を交換してほしい。
- ・ 支援者が避難者の方をむいているのか疑問に思うこともある。交流会で行政や役員の挨拶が続いたり等、形式に捕らわれていたり、助成を受けている方向を見ているのではないかと思う時がある。
- ・ 地元の自治会に入り、地域の行事や活動などに参加している。入会希望者が増えている会もあるが、そうならなかった団体はどうすればいいか。
- ・ 他団体と連携して活動している。事前調査など大変だが、「なんでも楽しみながらやらないと！」という気持ちでやっている。
- ・ 地域を越えたコミュニティづくりを目的に、バスハイクや町別交流会、その他近隣地域に向いて交流会を行っている。避難者と支援者の参加は半数ずつ。

- ・ 出てこない人はどこにも出てこない一方で、元気な人はどこへでも出て行く。
- ・ 人数や規模は団体によって様々。避難先地域の社協と連携して交流会開催。
- ・ 同じ避難元の若者と高齢者がつながることが安心になる。安心して暮らせることを考えると、若者同士より、上の世代とのつながりが多くなる。世代を超えたつながりが活動の中の大部分を占めている。
- ・ 避難先地域の人とは遠慮して話せない。同じ避難者と話したいという声が多い。
- ・ 同じ避難者でも知らない人同士。その人たちが集まってコミュニティをつくるのは難しいが、大切なこと。
- ・ 加須市には双葉町民がたくさん避難したため、外とつながる必要がなかったと聞いた。
- ・ つながるきっかけが必要。車のナンバーをみて声をかけてつながりを広げたりもした。
- ・ 団地だとコミュニティが閉ざされると聞いたことがあったため、団地の自治会と一緒に活動することにした。「避難者の集まり」より「団地の集まり」として声かけをした（団地の夏祭り、防災訓練等）。
- ・ まずは参加してもらい、少しずつ安心した環境をつくる必要がある。当事者としての活動と避難先地域（団地）としての活動を自分で選択しながら活動していくことが大切。

■テーマ2：避難者一人ひとりが安心して暮らせるように、今後、避難者同士どのようにつながることが大切でしょうか？

- ・ 自治会組織を作り、連絡が取れるようにしている。また、地域のお祭りなどの行事に参加して地域でも交流するようにしている。
- ・ 団体で交流会やバス旅行などを実施している。
- ・ 茨城に移住したが、もともとある団体は年齢層が高く年代が異なり入りにくかったため、近所に福島ナンバーの車を見つけると声をかけて、避難者同士つながっていった。今では、ランチ会を中心に活動している。
- ・ 避難者という括りだけでは集まりにくくなっている。避難元や世代が異なると難しい。
- ・ 帰還困難区域から避難している人たちは、同じ避難元だとつながりが強い。
- ・ 1つ1つの会は小さくても、支援団体やいくつかの団体が共催でイベントをすると人数も集まる。助成金を取って、みんなで避難元のお祭りに参加したりしている。
- ・ 避難解除が進み、富岡町ではそろそろ避難先に住民票を移すようにと調整懇談会の資料に記載があった。そんな話をみんなとしたい。
- ・ 避難解除になっても、実際に自分の目でみないと、話だけでは分からない。
- ・ 避難者の多い地域で地域交流懇談会を実施していて、その時には弁護士などにも参加してもらっている。
- ・ 最近になって初めてサロンに参加した人もいる。まだまだ当事者のサロンは必要。
- ・ 他の地域の団体とも連携している。
- ・ 支援金が減ってきているので、会のイベントは会費制に変えた。

- ・ 解除されて帰った人もいるが、2割くらいは作業員。帰っても安心して暮らせない。
- ・ これまではMLで一方的な情報発信だったが、LINEグループを始めて、直接会えなくても繋がっている安心感を得られるようになってきた。LINEグループに入っているのは全員ではない。数回会って、グループに入ってほしい人に運営側が声をかけて入ってもらうようにしている。
- ・ なかなか連絡が取れない人には「支援物資を配るよ」と声をかけてみている。支援物資は何でも嬉しい。
- ・ 参加者全員が繋がれるように、居場所づくりなど行っている。資金がもっとあればと思う。それぞれの人に必要なサポートを紹介し、繋いでいる。つながった人が「元気？」と声をかけることが大事。物資はハロウィンやクリスマスのイベントなどで残った詰め合わせになっているお菓子のようなものが嬉しい。
- ・ 会の予定表を配っても返事がない人には電話をしている。電話をすることで今度行くよという返事をもらえたりする。一度も参加しない人もいるが、登録を抹消するようなことはしていない。他のサロンとの横のつながりも大切にしている。
- ・ 自分のことで精一杯だが、自分たちで立ち上げた団体という責任から活動している。
- ・ 市内にいる避難者と交流したいと市役所へ行ったところ、自転車をもらったので、市内を走り回って福島に関連する車のナンバーを探した。しかしそう簡単には見つからない。それを聞きつけたボランティアが、市にお願いしてお便りをだしたことがきっかけでお茶会を開催。1年後、避難者だけの団体として活動を始めた。
- ・ 月に1度お便りを発行している。現在113号まできた。
- ・ 避難者同士はつながりが強い。困ったことがあると連絡を取り合いながら励まし合っている。支援者が入ると話せないことがある。
- ・ 活動当初、避難者10人に対して支援者15人。支援者には「大変だったね」ばかり言われた。故郷の話など話したくても話せなかった。「応援しています！」という支援者とは一緒に活動していくことは難しいのかもしれない。
- ・ 市から市内の避難者全員にお便りを発送してもらっている。お便りを通してサロンに参加できない人ともつながれるしくみも大切。
- ・ 当初は支援者が立ち上げたが、途中で避難者を代表として活動している。代表が避難者になったことで参加しやすくなったかもしれない。最近ではパパ世代の男性の参加も多い。
- ・ 避難者はみんな同じというスタンス。誰でも参加できる。LINE等を使って連絡をマメにとっている。1回会ったかどうかの人でも連絡だけは取るようにしている。SNSだけでもつながるしくみをつくっている（子供の成長に応じて受験等不安なことも増えてくるので、日頃からつながっておくようにしている）
- ・ つながりたい、つながっておきたいと思える会を目指している
- ・ 逆に地域とはつながりにくいが、埼玉県民2名に参加してもらっているが、1つ発言す

る度に、その反応が怖い。恐くて発言できない人もいる。無理のない範囲で発言して、悩みを話せる場づくりに努めている。少しずつ地域とつながる。地域とつながれる人がつながり、輪を広げていく。

- ・ 団地の居住者が減っているため、地域のサロンに参加している。団地の中に「花と緑の会」があり、運営会員2名が参加。合同で忘年会を開催している。そういうことの積み重ねで、自然と地域のつながりができ、地域になじむようになってきた
- ・ 避難者同士がつながり、周りの地域の人とつながり、避難者色を薄めている。
- ・ 双葉から避難した人がつながっていた地区のセンターを利用することがある。ここに行けば誰かがいる。誰かに会えて、話しができる空間がよいと思った。
- ・ 避難者同士のつながりは卒業。
- ・ 地域の行事に参加することで、地域に溶け込む。
- ・ 避難当時、まわりに被災者であることを話せなかったが、地元の友達には話せる。そういう空間があったことがありがたかった。
- ・ 避難先、避難元の両方に（安心できる場が）あること
- ・ 今住んでいるところでつながりをつくっても、また住宅給与が終わる2年後にはまたなくなるかもしれない。
- ・ 避難者が多く集まって入居したため、避難者が孤立してしまっている。
- ・ 一番の問題はここを出た後も支援が受けられるのか？ということ。もう一度避難者の問題に向き合うようになるのではないか。本当は、これを話しできる環境が大切。
- ・ 自主避難の方と話すのが難しい。話題が合わない。

■テーマ3：テーマ1・2のために、私たち（当事者グループ・団体）は、どのようなことができるでしょうか？また、大切にすべきことはなんでしょうか？

- ・ 6年過ぎて、最近は動きが少ないが、仮設を出たら避難者ではなくなる。団体のことより、自分のこれからのことで精一杯である。
- ・ 今の住宅をいつか出なければならぬことを考えると、今、つながっておく必要がある。
- ・ 団体の活動は続けていくつもりだが、参加しない人への対応をどうしたらよいのか。どこにいるのかもわからない、まだ一度も会ったことがない人もいる。個人情報のカベがある。
- ・ 今後のことを考えると団体の活動に参加しない人の声も大事にする必要がある。
- ・ 避難元の町単位でないとまとまりにくいのではないか。
- ・ 団体の自主運営のために財政の確保も大切。小物の売上など。
- ・ ふれあいフェスティバルは、再会の場であり出会いのきっかけの場だった。継続できたらよい。
- ・ 1番必要なのはお金。あとは情報。多様な情報を必要としているので、横のつながりで

幅広い情報を知っておくこと。

- ・ より具体的な支援が必要になってきている。
- ・ 東雲は人数も多く、支援もあり環境もいい。だからこそ、逆に孤島に置かれている感じで、現実の厳しさにまだ直面していないのではないか。東雲を出る時こそが、本当に支援が必要になると思う。
- ・ 孤独感のない環境作りを目的にしている。楽しい場作りをしていきたい。
- ・ 地域とのつながりも作りながら、福島県の情報も会の情報紙に掲載している。
- ・ 自宅を開放して料理教室などを行っている。ランチ会で一緒にご飯を食べるのを楽しみにしているので続けていきたい。
- ・ 避難解除によって固定資産税もかかってくる。資産管理をしながら他の地域に移住するのがいいのか、これから考えて行かないといけない。
- ・ 避難解除により、これまで避難者だった人も自主避難者となる。これまで地域によって分断されていたが、これからは一緒に頑張る問題を可視化していく必要がある。
- ・ 避難先によって適応される制度も違うため、ごく親しい人以外には話ができない。このような事を話せるつながりが必要。
- ・ 自分の会で話しにくいことを話せる第3の場。
- ・ 避難者同士だけでなく、地域の人とのつながりも大切。
- ・ 最近になって地域の人に「大変でしたね。話を聞いてもいいですか？」と聞かれた。誰でも避難当事者になる可能性がある。当事者だから伝えるべきことがあると感じている。こういう避難者もいると避難者の状況を伝えるようにしている。こども食堂や地元の野菜づくりをしている方ともつながっている。先日は高齢者の方を車で送迎し、畑で自由に農作物を取ってもらった。とても喜んでいた。
- ・ 原発のある茨城の団体なので、地域の人には、「家族と連絡を取れる方法を確認しますか？」「家族と一緒に避難できなかつたらどうしますか？」と声をかけたりしている。逃げる時は自分の判断だということを伝えたい。お互いの経験を話し合っているが、まだ気持ちの整理がつかず話せない人もいる。
- ・ 元々双葉でお店をしていた人たちが関東に避難してお店を始めていて、その人たちのインタビューを冊子にまとめた。インタビューした方、冊子を見た方を、冊子を通じてつなげたい。双葉で若い人たちがこういうことをやっているということを伝えたい。口コミ、友達伝えに仲間を増やしていった。
- ・ 横のつながり。LINE 等のツールを使用し、誕生日祝い、悩み等なんでも話せる場づくり。「絶対相手を責めない」をルールにしている。
- ・ 今後の課題は地域との共生。帰還する／しないで悩む過程でなるべく孤立しないようにしたい。
- ・ 避難先地域の住民に認められていないのではないかという不安を取り除くためにも地域とつながることは必要

- ・ あちこち点在して暮らしているため、地域に溶け込むより、会としては同じ避難元の町・ふるさとの町民同士とのつながりづくりをしている
- ・ いつまでも避難者とは言っていないけれど、避難は避難。自分の家をふるさとに置いてきているから。そういう気持ちを理解してほしい。家が建たったこと＝落ち着いた、もう大丈夫だ！というわけではない。たとえ戻れたとしても、家を直すなどまた違う課題が出てくる。
- ・ 当事者と支援者は、初めから一緒に活動しているので、地域となじんでいる。当事者だけで何かすることはできない。
- ・ 団体自体が小さいため、相手が不特定多数になる。毎年ふるさとの味として「よっちゃんスルメ」をイベントで出店したり、パンフレットを作成する活動をしているが、単純に団体と団体のつながりだけではない。
- ・ 団体に関わっているその瞬間だけでもふるさとのことを思い出してもらおうことがコンセプト。祭りやイベントの中で、震災前のことを思い出してもらおう。そのために、地域の人と避難者、避難者と避難者、避難者と新しい何かを生み出してもよい。色々な団体とつながっていいと思う
- ・ 資金があればあるだけほしい。交通費がバカにならない。自己負担では続けられない。お金がかからない方法も考えたがお茶一杯提供するだけでお金がかかる。安くすませることを考えるより、お客さん扱いしないで、みんなで役割分担して活動していくことが大切。
- ・ 資金援助が避難者を忘れないということにもつながる
- ・ →1年目は助成金なしで活動した。しかし資金がないと、交通費もだせないで、周りに「一緒にやろう！」と言いきけない。福島県—東京間の交通費の自腹はきつい。一緒に活動する人を増やす意味でも助成金は大切
- ・ 今回のお便りに初めて実験的に「募金窓口」を掲載した。実際の募金はまだないが、感謝状も用意している。そういう意味で支援者や世間とつながるということもある
- ・ できればスタッフの給料も支給したい。支援者だから自腹はできれば避けたい。助成金の種類によって支給できるものが違う
- ・ あまりに高額な助成金では、使いきれないといけないというプレッシャーになる
- ・ より多く出会いの場をつくる：連携を図る、地域を越えて関わる、各地から参加できて、話ができる場（ふれあいフェスティバル）
- ・ 町政懇談会で居住地に住民票を移したほうがいいと言われた（富岡町）
- ・ 町田で相馬に行つての交流会を申し込んだが、相馬でつなぐ交流先がなかった
- ・ 連携、交流する、一緒にやることで、人と人が交流し、人が増える
- ・ 他の会と一緒に企画、運営をする
- ・ 常にふらふらとしている状況（避難者の気持ち）：安心できる場。話が、言葉が通じる安心感・解決はしなくても、話ができる場があること

- ・ ふれあいフェスティバルでの盆踊りに行政の人と一緒に輪に入っていた。そういうことが大切！

以上